

大正時代における芭蕉評論の行方

―「古池や」の句を中心にして―

黄 慧 君

はじめに

明治期の新旧両派が唱えたいわゆる「蕉風閑寂論」は、明治期の俳壇における芭蕉論の主流となっていた。この時代に日本での留学生活を経験した周作人は、新旧両派の著作の論調に影響され、独自の「蕉風閑寂論」を形成した。これらのことについては、拙論「周作人における芭蕉観―「閑寂」の語について―」¹⁾において論じた。

さて、このような「蕉風閑寂論」は、大正期に入ってどのようなようになっていたであろうか。この点についての研究は意外と盲点となっている。本稿では、明治期についての考察を踏まえながら、大正時代に出版された芭蕉俳諧研究書の代表作（巻末表に一覧）を読み進め、とくに「古池句」を巡る「蕉風閑寂論」の認識を分析した上で、大正期における芭蕉評論のありかたを明らかにしたい。

第一章 大正期の代表的芭蕉論及び「古池句」への評論

一 木津碩堂と岡本黙骨

大正期における「蕉風論」に触れる前に、大正期の芭蕉研究代表作から見られた芭蕉像を考察する必要があると思ひ、大正期に活躍していた国文学者、俳論家、大学教授のような知識人の著した芭蕉研究資料を表にまとめ巻末に添付した。童蒙用のものではなく、すべて一般向け以上を読者の対象としたものである。

この時期としては、木津碩堂のいわゆる「芭蕉偉人説」と、岡本黙骨の主張していたいわゆる「芭蕉聖者説」²⁾とが注目される。

大正三（一九一四）年に出版された岡本黙骨の『俳聖芭蕉』では、芭蕉を「聖者」と表現する論調が見られたが、その根拠となったのは、芭蕉の偽書といわれる『行脚の掟』²⁾である。旅中の一茶一飯の恩に感激した芭蕉の素朴な性格、俳道に精根を尽くした恬淡とした生活態度に対して、岡本は、芭蕉を次のように評している。

すべてこの心を以て一生を送つた芭蕉に人格の高大なることは、敢えて更に贅するの要あるを見ず。実に古今の間に冠絶した聖者と謂ふべきである。

このように芭蕉を「聖者」とする見方は、すでに明治四十二年に出版された天生目杜南の『評伝芭蕉』にも見られる。⁽³⁾しかし、杜南が、芭蕉の生涯を徹底的に浪漫化した上で彼を「聖者」とみなしていたのたしいし、岡本は、芭蕉の無欲素朴な人間性に注目し、「詩人」という観点から芭蕉を「聖者」とする見方を主張していたのである。

一方、十年程後の大正十一年に出版された木津碩堂の『新しい研究芭蕉翁の面影』（昭和七年に『俳聖芭蕉翁の面影』として再版）においては、次のように芭蕉を「偉人」という言葉で表現する論調が見られる。

頃は寛文年間のことである。北村季吟の門下から黒染めの袖短くか、げた白竹の枝長く曳いた一人の偉人が現はれ出たが、忽ちにして天下の俳壇を圧倒し、正風と記した傘下無量三千余の門人を集めて統一の令を海内に布いた。其の偉人とは誰だろう。僧に似て塵のある俗に似て髪のない松尾芭蕉翁である。松尾芭蕉翁、初めの頃は暫く壇林調に親しんでゐたが、如何に其の句調の厭しくして誦するに足らぬのを慨き、この刷新を計らうと思ひ立ちた。それより遍く名山大河を踏破して自然の神秘を発き、又杜律が風骨を探り、西行が山家集の微妙を究めなどして、嘗胆臥新年を

積むこと久しかつたが、終に大に悟るところとなつて、正風と名づけた一格を案出するに至つた。

かつての杜南と同じように芭蕉が手放しで称讃されている。芭蕉の生涯を詩想を磨く旅とみなす論調は、すでに明治の新派俳人から批判されていたが、⁽⁴⁾にもかかわらず、芭蕉をあくまでも「偉人」と主張する、明治俳壇の旧派に通じた芭蕉神格化の姿勢に立つ論調とよみとれる。

さらに、同じ著作の中の「翁の略伝」の節でも、

詞華は高く一世に鳴つてゐたが、其の韻も長へに流れて天下の法となり、後の世に至るも俳諧正風体の祖神と仰がれてゐるものは松尾翁である。

と、明治期の旧派俳人が唱えたのと同様に、芭蕉を「祖神」とする神格化された芭蕉像が受け継がれていることが読み取れる。

二 木津の「古池句」解釈と王維

では、この両者は、芭蕉の代表句と見なされていた「古池句」を、どのように解釈していたのであろうか。

明治の旧派俳人となら変わる所のない説を述べていた木津の解釈から見よう。それは、一言、

王維が詩の妙をあらわしたかと思ふ。

『新しい研究 芭蕉翁の面影』大正十一年刊

というものであった。

「古池句」を王維の詩趣と結びつけて解釈する姿勢は、明治から大正末期にかけての芭蕉論全体を見渡してもなかなか見当たらないが、この見方は、明治の旧派俳人の、「古池句」を禅的に解釈する姿勢とつながるものがあつたのであろうか。

同書の「誄辞」の節には、「古池句」に関わる春湖の「参禅問答」の説が紹介されている。

翁は初めて仏頂に就いて禅を修めた。仏頂は常陸国根本寺の住職であつたが、臨済宗と呼ばれてゐたほどだから、禅機は世に高く戒光は遠く輝いて、衆庶の渴仰してゐることも亦一方ではなかつた（中略）。互に仏道を論じ禅味を談じて其の談論が漸く酣なる頃、翁は忽ち禅法の秘鍵おのづから解けたやうな心地がして、大いに其の機微の妙を悟ることを得た。其の庭前から洩れて来たちやぶんといふ一声を耳に傾けて、思はず、

古池や蛙飛び込む水の音

と吟じたが、仏頂を聞いて其の風雅参禅の功德に驚喜し、暫く言葉も出なかつた。これより翁の俳諧はいよいよ神に入つて所謂正風体の基をた立つることとなつた。

(右同)

明治三十一（一八九八）年に出版された旧派俳人三巴の『俳諧古池注集』には、芭蕉の「古池句」に付会された「禅味」や「禅理」の諸伝説が収録され、「芭蕉・禅・閑寂」の三者を一体にした明治俳壇の芭蕉神格化の様相がはっきりとよみとれるようになってゐる。このよな見方こそが明治俳壇の主流であつたが、「参禅問答」のようなエピソードは、後に新派俳人から猛烈に批判され、芭蕉を高めるための異説、妄説にすぎないと攻撃されることとなる。このような歴史の経過を経ていたにもかかわらず、木津は、大正十一年という時期になつても、相変わらず「参禅問答」の説を巻頭に取り上げて、明治旧派俳人の示した芭蕉神格化と同様の姿勢を示したのである。言葉こそ違つたが、木津のいう、「古池句」は「王維が詩の妙をあらわした」と言う説は、「王維」を「禅」と読み替へることによつて、「芭蕉・禅・閑寂」の三者を同一視、一体化した旧派の論調の繰り返しにすぎないと言えるのである。

木津は、『芭蕉翁の面影』の巻首「翁の誕生地」の中でも、同じよな姿勢を示している。

伊賀といふと邊陲な小さきひ国のやうに思ふものもあらうが、しかも地は時の帝都に近くて、位は東海道十五ヶ国の首めに列り、四にも緑滴る連巒もて圍まれた一つの仙境である。涓々と流れてゐる水は、或は山腰を繞り、或は平野を貫いて、北には巖倉の峽南には赤目が瀧の勝区がある。

このように、芭蕉の生地である伊賀の五庵（無名庵、瓢竹庵、東麓庵、西麓庵、蓑虫庵）の風景を美文調で綴り、明治期の旧派俳人であった杜南のように、芭蕉その人や芭蕉の生涯に関わる全てを浪漫化した姿勢を示しているのである。

三 岡本の「古池句」解釈

ついで、芭蕉を「聖人」という言葉で表現しながらも、旧派のいう「聖人」とは異なった姿勢を示していた岡本の説を見てみよう。「芭蕉・禅・閑寂」を一つにして考えた木津の「古池句」解釈に対して、岡本は次のように述べている。

一時は芭蕉の俳諧には必ず禅機を含めるものとして、牽強附会の説を為すを好む傾向をすら生じた。（中略）句としては実に幼稚な単純なものに過ぎない。而して此句は幼稚なる自然描写であるけれども、それがやがて芭蕉が自然の深奥に悟入する前提であった、此点から見て、此句は必ずしも全く無価値であるとは言へない。但だ此の一句を以つて無上の価値あるもの、如く思ふのは、はじめ芭蕉を崇拜するの余りに出で、終に芭蕉を賊する徒輩に濫用せられるの結果を成した。斯の如くした、無暗に芭蕉の句と禅とを結びつけやうとする事は極めて無価値な所業であるけれども、然し俳諧と禅味との共通点といふやうなものは確かに容認される。俳句と禅との共通し且つ合致する所は、あらゆる物象の真相に対する直感、直覚である。

『俳聖芭蕉』 日月社 大正三年)

これらの記述の中の、「俳句と禅との共通し且つ合致する所は、あらゆる物象の真相に対する直感、直覚である」という所は、子規の主張していた「古池句はありのままの一句」とする見方^⑤とほとんど同じものと読み取れる。

以上のように、芭蕉の人間像、そして「古池句」に関わる認識は、當時を代表する論と思われる木津と岡本の間で、見てきたように両極に分かれていたことが分かった。

第二章 「古池句」に関わる大正期の

一般的な認識

岡本と木津の主張した芭蕉の人間像と「古池句」への理解は、大正期における芭蕉論の両極端の代表論と考えられる。同じ時期の他の研究者たちの芭蕉論についても、これらのどちらに近いかを検討している。

一 木津に近い論調

まず、木津のように、蕉風俳諧における「禅味」の源が、芭蕉と仏頂の参禅問答にある、と理解した論調には、大正十二年に出版された『俳聖松尾芭蕉伝』（研吟会）がある。著者の小嶋健岳（明治十年十月）昭和二年七月、明治・大正期の国文学者・俳人・芭蕉俳諧評論家

法政大学講師)は、芭蕉の「馬ほくほく我を絵に見る枯野哉」の句を「禅味」と「参禅説」に結びつけて、次のように理解している。

馬ほくほく我を絵に見る枯野哉

さびしさの中に動かざる言妙の力あるは禅味の賜である。元來仏頂和尚は常陸国鹿嶋の根本寺の住職なるも、しばしば江戸に来て芭蕉の庵に宿禅機の悟道に少からざる感化を与へ、幽寂の時に動ぜず誹諧を歌ふも、蓋し俳禅一味の力であるといはねばならぬ。

このように、「古池句」のみならず、蕉風俳句一般が禅から影響され、蕉風の「根本」となつたと、極端に理解している。

さらに大正十四(一九二五)年に出版された村上計二郎(明治十七年六月)昭和五十一年五月、俳人・芭蕉俳諧評論家)の『列伝 偉人の結婚生活』にも、

翁は三十七八才頃から仏頂に就いて禅を学んで悟りの道に入つてゐたので、其の句には深い思想的背景を有つてゐた。又漢学を伊藤坦庵に学びて殊に莊子を愛読したので、其の生活は極めて清淡であつた。東北旅行の飯坂温泉に病んで、道路に死なん、之天命と云ひ、

古池や蛙飛び込む水の音

の句の如きは、閑寂に徹せるもので、自然と自己が全く合一の境地に達してゐる。芭蕉の素養と人格なくして容易に出るものでは

無い。

と、「古池句」は、禅学の世界で産まれた「閑寂」な一句であると強調されている。

私の調べたかぎりでは、木津を除けば、「古池句」を「参禅問答」の話と結んで人格化した大正時代の論調は、以上の二人の著作の中にしかみられなかった。

二 岡本に近い論調

その一方で、「古池句」に附会した「参禅問答」を批判する岡本の説に近い論調は、この時期急速に増えてくる。出版の年次をおつて見ていこう。

まず、大正二年に出版された沼波瓊音の『芭蕉句撰講話』には、次のような一節がある。

古池や蛙飛び込む水の音

句の意は説明するまでも無い、明らかである。古い池がある。春日静かなる午後であらう。蛙がドプーンと飛び込んだ。そのときに湧いた閑寂なる印象を、少しも主観を入れないで、唯其俚に云つたのである。この句は禅の意を寓したもので、禅学に通じなくてこの句の意味はわからぬやうに云う人は駄目である。(中略)一口にいへば閑寂である。(中略)この古池の吟に至つては渾然として円満具足の界が包括して写取られて居る。

「古池句」を「少しも主観を入れないうで、唯其俣に云つた」と指摘し、逆に明治旧派の主張である「禪の意を寓した」という見方を真っ向から否定している。ちなみに、このような「禪」と結びつけての解釈を否定するものであるにもかかわらず、この句のよさを「一口にいへば閑寂である」と言っていることは注目される。

また、「古池句」に対する瓊音自身の見方には、

この句は古来非常に神聖視されて来たが、私はこの句を芭蕉一生の句中の最傑作と称することには躊躇する。(右同)

というものもある。

これにきわめて近いのが高浜虚子の説である。「写生俳句」の視点に基づいて、「古池句」を「禪」と結びつけて神格化する説を批判した虚子は、大正七年の『俳句は斯く解し斯く味ふ』(博文館)において、子規の「写生論」を支持し、次のような考えを述べていた。

古池や蛙飛び込む水の音

実際に此句の如きはさうたいしたい、句とも考えられ無いのである。古池が庭にあつてそれに蛙の飛び込む音が淋しく聞こえるといふだけの句である。牽強附会の説を加へて此の句を神聖不可侵のものとするのは論外として、これ以上に複雑な解釈のしやうは無いのである。唯此句は芭蕉が、所謂芭蕉の俳句を創めるやうになつた一紀元を画すものとして有名だといふ説は受け取り得べき

説である。即ちそれ迄の芭蕉は談林調と言つて、つとめて滑稽酒楽を言つてゐた時代の句になづんでゐたが、此句を作つた時代から初めて今日のやうな実情実景をその俣に描く芭蕉流の俳句を作るやうになつた。抑々その頓悟の句が此句であるといふのである。(中略) 斯る閑寂の趣こそ俳句の生命、榮であるべきを悟つた。閑寂趣味と其俣の敘写といふ事が、此句によつて初めて体现されたといふ事が何よりも芭蕉の満足することであつて、自分も此句を持つて、初めて悟りを開いたやうに考へたのであらう。柳緑花紅が仏者の悟りであるやうに敢えてものを遠きに求めるわけでも無く、実情実景そのまゝを朴直に叙するところに俳句の新生命はあるのであると大悟して、それ以来、今日に至るまでいわゆる芭蕉文学たる俳句は展開されて来るものとすれば、この古池の句に歴史的の価値を認むべきは否定することの出来無いことである。

江戸時代以来滔々と続く「禪」と結びつけるやうな解釈を念頭に、それを「牽強附会の説を加へて此の句を神聖不可侵の者とするのは論外」と、強く否定し、「実情実景をその俣に描く」「其俣の敘写」こそがこの句の命であると、繰り返し強調している。そしてここにも「閑寂趣味」という言葉で、この句の良さが指摘されていることは興味深い。

さらに、大正十年に出版された小林一郎(明治九年十月〜昭和十九年三月 東洋大学教授)の『芭蕉翁の一生』では、支考の『葛の松原』によつて端を発した「古池句」の神格化が批判されている。

この説は今読んで見ても、まことにさも有らうと点頭かる、ものであるが、更に之に附会して途方も無い説も出来た。此句にただ有難味をつけやうとする目的から、禪と俳との一致を主調する意味でかいた『古池真伝』などいふものがある。(中略)しかし俳諧には自ら俳諧の天地があるので、直ちに之を禪の附属物の如くに視してしまふのは間違ひである。

『葛の松原』以降生まれた、「古池句」にたいする「途方も無い説」、「ただ有難味をつけやうとする目的」の説を頭から否定している。また、大正十三年に出版された小林の『芭蕉翁句集評釈』においても、

此文には多少の誇張もあるやうに思ふが、兎に角之によつて此句の出来た時のやうすはよく分る。人里に遠い深川の庵で、春の暮方の至て静かな時独り瞑想に耽る折しも蛙の水に飛び込む音が寂莫を破つて聞えた。其の一声の中に自然の美しい調べが含まれて居ることを感じて、咄嗟の間に此の一句が出来たのである。閑寂の間に深い趣を見出すことが正風の俳諧の旨とする所であるが、此の一句にはよく其の特色が示されて居るやうである。之を禪の悟道と結びつけて説明するなどは見当違ひの甚だしいものであらう。

のように、禪と結びつけて古池句を神秘化した旧派の見方に対しては、

「禪の悟道と結びつけて説明するなどは見当違ひの甚だしいものであらう」とか、さらに、前述の『芭蕉翁の一生』においても、

禪を以て之を解するは解する者の自由であるが、翁自身の胸中には禪も何も無かつたのであらう。

と繰り返して否定している。

しかし、「古池句」を「參禪問答」と結びつけて人格化した見方を批判した一方、小林は「古池句」における文学的な価値観を冷静な目で見て論評してもいた。

真に俳道をして美を詩歌に競しめたものは、翁の力といはなければならぬ。
(右同)

と、「禪」と結びつけない形でのこの一句の価値そのものについては、「古池句」の誕生を俳句革新の道標と見なす必要があると、高く評価しているのである。

また、大正十四年刊行の木村三樹の『芭蕉蕪村子規三聖俳句撰集』においても、「古池句」の文学的価値は、「禪」とは結びつけられない形で、

遂に俳諧の大革命をなし、新機軸を出して正風と唱へ、発句として文学部門たる今の所謂俳句の第一歩を開くに至らしめたのであ

る。

と、高く評価されている。さらに、同じ年に刊行された野口米次郎（明治八年十二月～昭和二十二年七月 大正、昭和前期の詩人・小説家・俳句評論家）の『芭蕉論』（春秋社）でも、同じような評価が続いている。

「古池や蛙飛び込む水の音」で、静寂を破る一つの小さい声を聞いたに過ぎない。（中略）実際芭蕉の幽寂な詩境はこの句を以て、一段の進歩をなしたであらう。

とある。「幽寂な詩境」とある言葉に「禅」と結びつけるような言葉は添えられていない。

「古池句」を「參禪問答」に結びつけて神格化する論調、また芭蕉の人間像を神聖視する見方は、大正末期にも無くなったわけではない。しかしそれが主流を占めていないことは明らかである。

本章でとりあげたように、大正後半期に著された俳諧評論家や大学教授の著作には、「古池句」を「禅」と結び付けるような今なお残る風潮を、徹底的に批判したものが少なくなかった。その中には、「古池句」の価値を、「自然の美しき調べ」「閑寂の間に深い趣」「閑寂なる印象を少しも主観を入れないで、唯其俣に云つた」のように、純粹に文学面から積極的に認めるものが多い。明治の俳壇に主流を占めた旧派俳人の神格化された芭蕉論に対して、大正後半期にわきおこった

このような斬新な芭蕉論の台頭には、何か明確な要因があったのであろうか。

第三章 子規と虚子の芭蕉論

明治の俳壇では、「古池句に禅味があるかどうか」という問題をめぐって、新旧両派の間に論戦がまきおこっていた。その中で、特に「古池句」の神格化を終始一貫して批判した子規の主張が、大正期における「芭蕉新論」を誕生させる一つの要因となった可能性について考察してみよう。

子規は、明治期の旧派俳人が主張した俳句の「穿ち」「理屈」、いわば「月並調」を一貫して批判し、俳句における視覚的なもの、所謂「俳句の絵画性」や、「写生」をする手法の重要性を説いていた。こうした考えに基づいて、子規はまず、蕉風俳諧の印象を次のように述べている。

余は劈頭に一断案を下さんとす。曰く芭蕉の俳句は過半悪句駄句を以て埋められ、上乘と称すべき者は其何十分の一たる少数に過ぎず。否僅かに可なる者を求むるも寥寥晨星の如し。

（『芭蕉雑談』「悪句」明治二十六年十一月～二十七年一月『子規全集』による）

同じような考えは、明治三十九年に出版された『行脚俳人芭蕉 正岡

子規原稿』（私家版）からもうかがえる。

しかも俳句の楽しみは形而上の楽にして芭蕉は形而下の楽を有せず。多（一字分空白）の人にして形而下の快樂無き殆ど生を保つ能はず。芭蕉は、この必要を充たさんがために、形而下の快樂を漫遊に求めたり。

つまり子規は、芭蕉の俳句には、説明的かつ散文的な要素、それに詩としての純粹性、所謂「形而下」の意識が欠けていることを批判していたのである。このような考えのもとで、「古池句」も、蕉風俳諧の多くも、「悪句駄句」と考えていたのであろう。子規が『行脚俳人芭蕉』の巻末に添付した「芭蕉名句集」（子規が選出した蕉風俳諧の名句集）の中に「古池句」を収録していないのもそのためである。

では、俳句の抒情性や絵画性を重視した子規にとって、「古池句」に関わる従来から様々な人々が語ってきた「閑寂論」はどのように理解されていたのであろうか。

古池や蛙飛こむ水のおと

俗人は則ち曰く「到頭解すべからず」と。而して近時、西洋流の学者は則ち曰く、「古池波平かに、一蛙躍つて水に入るの音を聞く。

句面、一閑静の字を着けずして、閑静の意言外に溢る。四隣閑寂として車馬の紛擾、人語屐声の喧囂に遠きを知るべし。是れ美辞学に所謂筆を省きて感情を強くするの法に叶へり」と。果して神

秘あるか、我これを知らず。果して解すべからざるか。我これを信ぜず。その西洋学者の言ふ所や庶幾からんか。然れども、未だこの句を尽さざるなり。（中略）。以上は我臆測する所なるを以て、實際は此の如くならざりしやも計り難けれども、蕉の思想が変遷せる順序は、この外に出でずと思はる。その「蕉風」を起せしは、実にこの時に在りしなり。あるいは云ふ、この句は芭蕉が禪学の上に工夫を開き、大悟徹底せし時の作なりと。その事、甚だ疑ふべしといへども、この説を為す所以の者、また偶然に非ず。けだしその俳諧の上に於て始めて眼を開きたるは、禪学の上に眼を開きたるとその趣相似たり。参禅は諸縁を放棄し、万事を休息し、善悪を思はず、是非に管する莫く、心意識の運転を停め、念想観の測量を止めて、作仏を図ること莫れ、とあり。蕉風の俳諧もまたこの意に外ならず。妄想を絶ち、名利を斥け、可否に關せず、巧拙を顧みず、心を虚にし、懷を平にし、佳句を得んと執着すること無くして、始めて佳句を得べし。古池の一句は此の如くして得たる第一句にして、恰も参禅日あり、一朝頓悟せし者とその間髪を容れざるなり。而してかの、雀はチウチウ、鴉はカアカア、柳は緑、花は紅といふもの禪家の真理にして、却て蕉風の骨髓なり。古池の句は、実にその「ありのまま」を詠せり。否、「ありのまま」が句となりたるならん。〔芭蕉雜談〕

子規はまずこの句について、「西洋流の学者」の述べる、「句面、一閑静の字を着けずして、閑静の意言外に溢る。（略）是れ美辞学に所

謂筆を省きて感情を強くするの法に叶へり」という「美辞学」に基づいた評価を、そうかも知れないがよくわからない、と判断を保留する。さらに、江戸時代以来、明治の旧派俳人も強く主張する、「芭蕉が禅学の上に工夫を開き、大悟徹底せし時の作なり」という評価についても、信じられない、と一旦は否定するが、「禅」とつながるという点とは別の意味で確かにそうである、と肯定する。その禅と通じる点とは、余計な思いを捨て去って、「柳は緑、花は紅」のように、いわば「ありのまま」を詠んだ点にあると、結論付けている。

子規はさらに、「古池の句の弁」(『ホトトギス』明治三十一年十月号)においても、文学面から見た「古池句」の歴史的な価値観について言及している。

客有り。我草廬を敲きて俳諧を談ず。聞ふて曰く

古池や蛙飛こむ水の音

芭蕉

の一句古今の傑作として人口を膾炙する所、馬丁走卒もなおかつこれを知る。しかもその意義を問へば一人のこれを説明する者あるなし。今これが説明を聴くを得んか。

答へて曰く、古池の句の意義は一句の表面に現れたるだけの意義にして復他に意義なる者なし。しかるに俗宗匠輩がこの句に深遠なる意義あるが如く言ひ做し、かつその深遠なる意義は到底普通俗人の解する能はざるが如く言ひ做して、かつてこれが説明を与えざる所以の者は、一は自家の本尊を奥ゆかしがらせて俗人を瞞着せんとするに外ならざれども、一は彼がこの句の歴史的関係

を知らざるに因らざるばならず。古池の句が人口に膾炙するに至りしは、芭蕉自らこの句を以て自家の新調に属する劈頭第一の作となし、従ふてこの句を以て俳句の変遷の第一期を劃する境界線となしたるがために、後人相和してまたこれを口にしたりと見ゆ。しかるに、物換り時移るに従ひ、この記念的俳句はその記念の意味を忘れて、かへつて芭蕉集中第一の佳句と誤解せらるるに至り終に臆説百出、奇々怪々の附会を為して俗人を惑はす結果を生じたり。さればこの句以前の俳諧史を知る如かず、意義においては古池に蛙の飛び込む音を聞きたりといふ外、一毫も加ふべきものあらず。もし一毫だもこれに加へなば、それは古池の句の真相に非るなり。明々白地、隠さず掩はず、一点の工夫を用ゐず、一字の曲折を成さざる処、この句の特色なり。他あらんや。

「俗宗匠輩がこの句に深遠なる意義あるが如く言ひ做し、かつその深遠なる意義は到底普通俗人の解する能はざるが如く言ひ做し」とは、明治の俳壇にひろがっていた旧派宗匠たちのいう「禅」にひきつけての「臆説百出、奇々怪々の附会を為して俗人を惑はす」ような解釈を指す。その上で、「古池の句の意義は一句の表面に現れたるだけの意義にして復他に意義なる者なし。」と、端的に述べ、この句の価値を、「明々白地、隠さず掩はず、一点の工夫を用ゐず、一字の曲折を成さざる処」にあると締めくくっている。芭蕉自身は、「この句を以て俳句の変遷の第一期を劃する境界線」と自覚していたのだと述べ、それ以上の余計な解釈のさしはさまれる余地のないものとした。

ここに、第二章第二節で触れた高浜虚子（『俳句は斯く解し斯く味ふ』）の考えを併せてみると、二人の言説はほぼ同じものといつてよいほどに似ている。虚子の芭蕉論は子規の芭蕉論をきわめて忠実に祖述したものにほかならない。俳句の革新に必ず言及しなければならぬ子規、そして子規の主張を受け継いだ虚子のような名手が主導した蕉風俳諧の論調は、大正期俳壇における芭蕉評論の導きとなり、芭蕉評論を理性的に促進させる大きな要素となり得たのではなからうか。

おわりに

明治期の子規が、芭蕉の俳句について語った、「明々白地、隠さず^お掩はず、一点の工夫を用ゐず、一字の曲折を成さざる処」という評は、大正期後半にわきおこった清新な芭蕉論の素地となり、それを祖述した虚子の俳壇的地位の大きさが、結局、明治以来の旧派的芭蕉論を押しさえ込んでいったと考えられる。その一方で、このような芭蕉論の台頭は、大正モダニズムを背景とした新しい俳句運動に影響された、という見方も可能であろうが、筆者の力不足により、大正期の俳句運動そのものについての十分な考察が出来ていない。今後の課題としたい。また大正末年近くから次々と出版される萩原井泉水による芭蕉論は、研究史の上で早くから注目され、芭蕉の人間像を新しく見直そうとしたものという評価があるが、これらについては、昭和前半期における芭蕉評論のありかたを考える機会に言及してみたい。

【注】

- (1) 『和漢語文研究』第十三号・平成二十七年刊。
- (2) 刊年不明の単行版もあるが、『芭蕉翁七書（蕉門七書）』（享和元（一八〇二）年刊）の中に「俳諧二十五条」や「嵯峨日記」「奥細道」などとともにおさめられたり、『随齋諧話』（文政二（一八一九）年刊）、『関清水物語（二篇）』（文政九（一八二六）年刊）などにおさめられたりする形でひろまった。今日では偽書とされ、芭蕉の各種全集類にもおさめられていない。
- (3) 明治四十二（一九〇九）年に出版された天生目杜南（明治期の旧派俳人代表）の『評伝芭蕉』（博文館）では、「芭蕉の生涯」「芭蕉の人物」「芭蕉の逸話」の三方面から、芭蕉行脚の姿を、浪漫化し、美文調でえがいている。特に「芭蕉の人物」においては、「聖者」という言葉を用い、当時の旧派俳人に共通した神格化された芭蕉像を述べている。
- (4) 子規を始めとした新派俳人は、小築庵春湖などの旧派俳人の唱えた「聖者」「偉人」という言葉に象徴される神格化された芭蕉像を批判した。また、芭蕉の行脚をひたすら浪漫化、神秘化し、「詩想を磨く」旅と評論する旧派俳人たちの説をも批判した。（正岡子規『行脚俳人芭蕉』明治三十九年刊。佐藤紅緑『芭蕉論稿』明治三十六年刊、など）
- (5) 芭蕉自身が王維の詩をどのように受容していたかを念のために見てみよう。従来の注釈書の中では、芭蕉の作品で王維の作品を踏まえたものとして二点が指摘されている。一つ目は、

みちのくの名所く、こゝろにおもひこめて、先せき屋の跡なつかしきまゝに、ふる道にかゝり、いまの白河もこえぬ。(中略) 岩瀬の郡すか川の駅に至れば、乍単齋等躬子を尋て、かの陽関を出て故人に逢なるべし。

(俳文「奥の田植え歌」『古典俳文学大系 芭蕉集』による)

『芭蕉必携』(一「典拠(漢詩文)・昭和五十五年刊)では、「彼陽関を出て故人に逢なるべし」の典拠を、王維の「送元二使安西」の一聯、「進君更尽一杯酒、西出陽関無故人」(『三体詩』『詩人玉屑』など)と指摘している。二つ目は、次の『幻住庵記』。

石山之奥、岩間のうしろに山有。国分山と云ふ。そのかみ国分寺の名を伝ふるべし。麓に細き流を渡りて翠微に登る事、三曲二百歩にして、八幡宮た、せたまふ。(中略)いと、神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ、根笹軒をかこみ…

傍線を引いた「根笹」は、『新編日本古典文学全集(七一) 松尾芭蕉集 俳文編(二)』(井本農一等編 平成三年刊)に、「たけ高く伸びた松」と語釈され、

『唐詩選』の王維の一首、「盧員外象卜崔処士興宗林亭過」の「科頭箕距長松下、白眼看他世上人」を踏まえた。

と指摘されている。しかし、江戸時代、とくに芭蕉が活躍していた元禄前後の時代における『唐詩選』の流布及び出版事情については、

もちろん芭蕉以前から明版本もしくは清版本の『唐詩選』は渡来していたけれども、当時、舶載の書物は極めて限られた筋しか入手できず、一般人士には高嶺の花にすぎなかった。芭蕉などの寓目する可能性は絶無だったのだからと
思われる。

(日野龍夫・諏訪春雄編『江戸文学と中国』昭和五十二年刊)という状況があったとされ、芭蕉がそれを見た可能性は低い。また中里富美雄氏は、芭蕉の作品における漢詩文を踏まえた表現を分析されていたが、王維の詩を踏まえた句は一つもないと結論を出されている(『芭蕉と中国文学』『櫻美林大学中国文学論叢』第十六号・平成三年刊)。

(6) 子規は『芭蕉雑談』において、旧派俳人と同じように、「禪」という言葉で「古池句」の妙趣を理解していたが、それは、「古池句」を「參禪問答」の逸話に結び付けて、「禪の閑寂論」を唱えた旧派の主張とは根本的に異なる。「禪」をもって「古池句」を理解しているものの、それはあくまでも禪でいう「柳は緑、花は紅」のように、自然の真実を「ありのまま」に直感であらわしたところが「古池句」の魅力であるとする見方であった。

(7) 久富哲雄「芭蕉伝記研究書目」(『校本芭蕉全集』第九巻所収)。

【補】

引用文の旧漢字のうち、現代通行の常用漢字に改めることのできるものについては、常用漢字に改めた。

表 大正期に出版された芭蕉俳諧研究書代表作品一覽

発刊（大正／西暦）年	発刊所	ジャンル	編著者	書名
二（1913）年	東亜堂書房	作品研究	沼波瓊音	芭蕉句撰講話
三（1914）年	日月社	伝記・総記	岡本黙骨	俳聖芭蕉
五（1916）年	俳書堂	伝記・俳論	山崎藤吉	俳人芭蕉
七（1918）年	新潮社	発句・句合	高浜虚子	俳句は斯く解し斯く味ふ
十（1921）年	大同図書館	作品研究	小林一郎	奥の細道評釈
十（1921）年	大同図書館	伝記・総記	小林一郎	芭蕉翁の一生
十一（1922）年	石塚松雲堂	伝記・総記	木津碩堂	新しい研究芭蕉翁の面影
十二（1923）年	中央出版社	選集・総集	木村三樹	芭蕉燕村子規三聖俳句選集
十二（1923）年	文献書院	伝記・総記	樋口功	芭蕉研究
十二（1923）年	研吟會本部	伝記・総記	小嶋捷岳	俳聖松尾芭蕉傳
十三（1924）年	大同図書館	作品研究	小林一郎	芭蕉句集評釈
十三（1924）年	春秋社	伝記・総記	萩原井泉水	芭蕉の自然観
十四（1925）年	日本書院	伝記・総記	村上計二郎	列伝 偉人の結婚生活
十四（1925）年	第一書房	伝記・総記	野口米次郎	芭蕉論
十五（1926）年	紅玉堂書店	伝記・俳論	萩原蘿月	詩人芭蕉
十五（1926）年	成象堂	作品研究	樋口功	評撰芭蕉句集
十五（1926）年	第一書房	発句・句合	野口米次郎	芭蕉俳句評選

表中の選書は『芭蕉研究資料集成大正篇』（久富哲雄編 平成五年発行）によるものである。

（二〇一六年八月三十一日受理）

（こ）う けいくん 本学文学研究科博士後期課程 国文学中国文学専攻